

「推し活」における行動・心理的側面と空想傾向 および主観的幸福感との関連

○菅野智子¹ 山村 豊²

(¹立正大学 ²桜美林大学)

キーワード：推し活、空想傾向、主観的幸福感

【問題・目的】

推し活とは、一般に強く気に入った人や物を応援する、支えるといった活動全般を指す。推し活は2021年のユーキャン新語・流行語大賞にノミネートされ、ネガティブなイメージからポジティブなイメージへと変革が進みつつある。推し活を通じて、幸福感や自己肯定感が上昇したり、自身の行動や認知が変化したという声も多い。

(久保(川合), 2022)もよると推し活はプロジェクションとの関連が大きいとしている。久保(川合)は著書の中で、腐女子の妄想について例示し、それらは先品愛という投射から始まり、やがて異投射が生じ、それらが仲間内で共有されることで虚投射が生じるとしている。しかし生み出される異投射も説得力が高くなければ共有されることは少なく、この過程で重要なのは個々の創造性や想像力があると推察される。

推し活に関連する調査や研究はまだ少ないうえ、推し活をしている人の中でも温度差があるように見受けられる。

本研究では大学生における推し活の行動的側面と心理的側面を調査し、推し活の活発さが空想傾向、主観的幸福感、ポジティブ志向といった心理特性とどう関連するか検討した。

【方法】

調査対象者 関東圏内の大学生140名(男性82名、女性55名、その他3名)、平均年齢19.63歳±0.86であった。

実施時期・場所 2023年4月から5月にかけて関東圏内の大学の授業にて実施した。

質問項目 推し活については、(株)ネオマーケティングが2022年に行った「推し活に関する調査」と(株)エイチームフィナジーが同年に行った「推し活にかかるお金と節約に関する意識調査」を本調査向けに一部改編して用いた。空想傾向についてはGiambra(1993)が作成したマインドワンダリング(DDFS)の日本語版(梶村・野村, 2016)を用いた。全12項目、5件法で測定を行った。梶原他(2016)と同様に空想傾向が最も低い場合を0点、最も高い場合を4点として得点化した。

素質的楽観性についてはScheier(1994)が作成した「改訂版楽観性尺度(LOT-R)」の日本語版(坂本・田中, 2002)を用いた。本調査では橋本・子安(2011)に倣い、楽観性に関する項目3項目と悲観性に関する3項目、計6項目を5段階で評定を求めた。主観的幸福感については、Diener他(1985)による「人生満足度尺度(SWLS)」の日本語版(Uchida他, 2008)を用いた。原尺度5項目を5段階で評定を求めた。ポジティブ志向については、橋本・子安(2011)による「ポジティブ志向尺度」を用いた。全14項目、5段階で評定を求めた。

手続き 調査対象者に承諾を得た上で、Google Formで作成した質問紙に回答を求めた。

【結果】

推し活をしている人を対象とするため、「推し活に関する調査」で「推し活をしている」と答えた75名を抽出し欠損値のない73名を分析の対象とした。

人生満足度尺度5項目について、主因子法・プロマックス回転による因子分析を行い、さらに因子負荷量が低い項目を除いて、再度、同様に因子分析を行ったところ、第1因子「人生

満足」(3項目)、第2因子「理想の人生」(2項目)の2因子が抽出された。

ポジティブ志向尺度の15項目について、主因子法・プロマックス回転による因子分析を行い、さらに因子負荷量が低い項目を除いて、再度、同様に因子分析を行ったところ、第1因子「上方志向」(7項目)、第2因子「平静維持」(3項目)、第3因子「ネガティブ否定」(3項目)の3因子が抽出された。楽観性尺度については1因子が中抽出された。

つぎに、推し活の行動的側面(実際に行っている行動)と心理的側面(どう感じているか)が実際の心的特性、つまり楽観性、主観的幸福感、ポジティブ志向との関連を検討するため、ピアソンの積率相関係数を求めた。その結果、「一日に推し活に費やす時間が長い」人($r=0.45$ ($p<.01$))、「一日に推しについて考える時間が長い」人($r=0.48$ ($p<.01$))、「一か月に推し活に使い金額が高い」人($r=0.44$ ($p<.01$))、ぬい活をしている人($r=0.36$ ($p<.01$))ほど「人生が変わった」と感じていた。また「一日に推し活に費やす時間が長い」人($r=0.24$ ($p<.05$))、「一日に推しについて考える時間が長い」人($r=0.37$ ($p<.01$))、「一か月に推し活に使い金額が高い」人ほど($r=0.38$ ($p<.01$))ぬい活をしていた。

推し活と各心理特性との関連を検討したところ、「一か月に推し活に使う金額」と空想得点($r=0.38$, ($p<.01$))、ぬい活と理想の人生($r=0.28$, ($p<.05$))に弱い正の相関がみられた。一方で「一か月に推し活に使う金額」と理想の人生($r=-0.25$, ($p<.05$))、ぬい活と理想の人生($r=-0.25$, ($p<.05$))「オープンな推し活への抵抗」と理想の人生($r=-0.25$, ($p<.05$))に弱い負の相関がみられた。

【考察】

本研究の結果、推し活に費やす時間が長い、考えている時間が長い、推し活にお金をかける、ぬい活をするといった行動的側面が高いほど「人生変わった」の相関が高いことから、時間と費用をかけたヘビーな押し活は主観的に「人生を変える」ことが示された。

また推し活に出費を惜しまない人ほど空想傾向が高いことが示された。おそらくイベントやグッズに投資することで日々の空想やプロジェクションへの「燃料」を補い、それらの上書きや強化しているものと考えられる。

行動的側面が高い人ほどぬい活といったプロジェクションに関わる行動をしており、ぬい活をしている人ほど人生におけるネガティブさを否定する傾向がみられた。推しのグッズを携帯することで、推しとの一体感が生まれ、これから人生に苦難があっても自分は乗り越えていけるといった人生におけるネガティブさを否定する力になっていると考えられる。一方で、出費を惜しまない人ほど理想の人生の得点が低かった。人生が変わったと幸福感にあふれる反面、経済的負担も大きく、社会的に望ましい人生ではない(故にオープンにはできない)という葛藤も垣間見えた。推し活は昨今社会的な認知が進んだ未知の部分が多い活動である。今後は推し活を掘り下げ、推し活をしていない人との比較も検討が必要である。

(すがのともこ・やまむらゆたか)